

後輩たちへのエール！

その57

2022年4月1日

関高校での4+7年間

◇今回は、市原賢優さん（郡上高校教諭・50回生）からのメッセージです！



こんにちは。2～3年次生の皆さん、お久しぶりです。この3月までの7年間、関高校で勤務していました、市原賢優（英語科）です。この度の定期人事異動により、同じ地区内の郡上高校での勤務を始めたところです。

四半世紀ほど前のことになりますが、高校生活のこと、そして、現在の仕事についてなど書き連ねていきたいと考えています。皆さんにとって、何かのヒントになれば幸いです。

1. 高校生活について

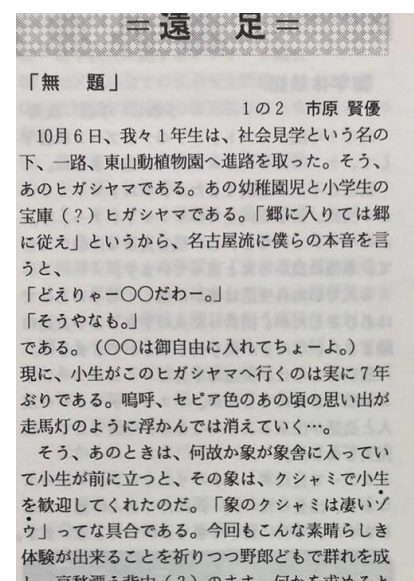
世界史の教員になることを目指し、おそらく、真面目に毎日を過ごしていました。英語と数学と古典の予習は欠かさず、英単語の小テストや漢字の小テストは合格するよう、それなりに頑張っていた記憶があります。

当時は、数学の「チャートテスト」なるものが2週間に一度の頻度で実施されており、合格点である60点を目指し、必死でした。数学Iの問題集4STEPの41番がトラウマ。理解するのに恐ろしく時間がかかりました。3年生では、当時の「国公立大クラス」（≡現Aコース？）というホームルームに在籍することになりました。

部活動は演劇部に（一時、放送部にも）所属していました。また、生徒会活動にも取り組み、偉大な先輩方と活動したことを覚えています。文化祭の前夜は、徹夜で作業にあたり、体育館西側の壁一面に、生徒全員で作り上げた壁画を貼り付けるなどしたことは、良い思い出です。（先生方が、よく付き合ってくださいな、と今では驚きすらします。）

下校時には、学校近くの書店（現在、1階と2階にそれぞれ別の塾が入居している、信用金庫裏のあの建物）に寄り、小難しい本を買い、少し背伸びした読書をするのを常としていました。読書を通じて、何者でもない自分が、どう生きるべきなのか、といった、およそ答えの出ない事柄について考え、鬱々とした毎日を送るようになりました。（皆さんが言うところの「陰キャ」そのものです。）

表面的には良い高校生活を過ごしていたように思われま



♪彩雲館で作業していたら発見してしまった、高校時代に私が書いた文章、あるいは「黒歴史」。

す。（実際、このように書き出してみると、それを痛感します。）しかしながら、内面は、そうでも無かったというのが真相です。関高校には、4年間生徒として在籍しました。1年間ほど、海外留学していたから、というのが表向きの理由ですが、それぞれが強烈な個性を持ち、火傷するほど熱い先生方の号令一下、数年後の大学入試に向けて遮二無二勉強することにひどく疲れていたからというのも、また真です。

（その事実素直に向き合い、それを文章に表すのに、四半世紀かかったのは、私が未熟たる所以でしょう。）

海外留学では、縁あって、カナダ・ブリティッシュコロンビア州南部、小さな国境の町の公立校に通うことになりました。この経験を通じ、多様な価値観に触れ、自らの狭隘な視野が、徐々に広がっていく貴重な機会になったことは、間違いありません。

私の関高校での4年間で、私の根幹の核となる部分を形作っている、としても差し支えないでしょう。



留学先だった高校の近影。留学時は、これほど綺麗ではなかった。

2. 教員の仕事について

「教員は世間知らず」と、よく言われます。兎角、やり玉に上がりやすい職業であることを割り引いたとしても、おそらく、ある程度は、正鵠を得ているのでしょう。その批判の根拠として、「毎年同じことを教えればいい」「大学を卒業してすぐ、『先生』と呼ばれ続け慢心している」「学校を卒業し、学校で勤めているから学校しか知らない」といった点が挙げられます。変化に対して柔軟でない、という示唆なのかもしれません。

そういった言説には、奉職する身として、真摯に向き合う必要がありますが、変化が激しい昨今、果たしてそれらがどれほど真実を反映しているだろうか、と考えることもあります。

教員になりたての20年前、文書等のデータのやり取りはフロッピーディスク(記録容量は1.44MB)でした。今、皆さんがスマートフォンを使って、気軽に撮っている写真は、たった1枚ですら、そのデータ容量を超えることがあります。

3年前、学校の黒板が、全てホワイトボードに代わりました。全教室にプロジェクターも完備されました。生徒一人につき一台のタブレット端末が貸与されるようになりました。

行事のあとのアンケートは、ウェブフォームに代わり、配付文書はアプリケーション上で共有された文書・画像ファイルに代わり、実技は撮影した動画を提出。教育環境一つとっても、20年前、想像すらしなかった変化を遂げています。



タブレット端末の画面を示しながら授業をする筆者。

環境に適応すべく、変化していくのが人間の常だとすれば、そして、学校も教員も人間社会を構成する一部であるとすれば、人間社会が変化すると同様に、教員もまた変化しているというのは、過言でしょうか。

知識を教え込むだけではなく、生徒の皆さんが主体的に考える機会を提供する度合いが増してきているという側面も、無視できません。関高校の実態についていえば、日々の授業はもちろんのこと、探究活動もまた、その最たる機会の一つではないでしょうか。探究活動を通じ、生徒の皆さんが、学校外の事物に関心を持ち、自分なりのアプローチで、大小さまざまな社会問題に立ち向かう術を考え出す場を設定するという、四半世紀以上前の「モーレツ受験時代」とでも呼ぶべき頃の地方公立進学校の教員には思いもよらない、コーディネーターとしての役割が、私たち教員には求められている、と痛感しています。

「黙って俺に付いてこい」から、「間違い、迷いながら、一緒に進もう」へと、教員の主な役割は変わってきたのではないかと、思われます。そして、そうであるならば、世間知らずで済まされる世は過ぎ去っているのだと、気づかざるを得ません。

3. 最後に

関高校での勤務で、様々な形で関わり、生徒の皆さんへの支援ができたのが、前項でも触れた、探究活動（SGH活動・FRH活動）です。多様な価値観に触れ、高校生が今できることを思い切ってやってみる場です。昨年度の末にあった探究活動発表会でのプレゼンテーションは、いずれも非常に充実したもので、間違いなく、皆さんの時代の到来を予見するものでした。



㊦ R3 年度関高校探究活動発表会での一コマ。

しかし、どうでしょう。振り返ってみてください。本当に満足いく結果にたどり着けた、という人は、限られているのではないのでしょうか。「本当は、〇〇したかったけれど、●●だったから、ここまでしか出来なかった」という感想を持っている人は、少なくないと思います。

達成感や成功体験は大切です。しかし、それと同様に重要なのは、「できない」「分からない」ことが分かるということです。高校生である今の自分では、手出しできないことが、当然のことながら世の中には数多あります。その限界に気づくことも大変意義深いと考えています。

「できないままでいい。」皆さんには、そういったメンタリティは無いはずですが、ここで大切なのは、学ぶことです。虚心坦懐に学ぶことで、自分の限界域を広げ、何者かになるためのレールの上にやっと乗ることができるのだと、関わった卒業生や在校生の皆さんの姿を傍から見ていて痛感しました。探究活動で扱うことは、大学受験には直接的には関係ありません。しかし、関高校が平成26年（2014年）にSGH指定を受けて以来、充実した進学実績を残しているのは、単なる偶然ではないはずです。「分からない」に向き合った生徒の皆さんが、あらゆる学びの重要性に気づき、学び続けることができた、ということの証左なのかもしれません。

皆さんが通っている関高校で、私は生徒として4年、教員として7年の計11年過ごすことができました。今年、44歳になりますが、実に人生の四分の一を関高校と共に過ごしてきたことになります。高校を卒業したときは、愛校心など、みじんもなかった私です。それどころか、高校時代を忘れ去りたいとさえ思っていた時期もあります。

しかし、何の因果か、勤務することになりました。（本県教員になった時点で、いつかは勤務するかもしれないと覚悟できていなかった私の浅はかさこそ、穴でも掘って、埋めておきたい！）関高校の生徒の皆さんと日々を過ごす中で、皆さんが発揮する、積極性・主体性・創造性を目の当たりにしてきました。

「高校生は、凄い！」

この一言に尽きます。君たちは凄い。君たちを誇りに思います。私は、どれほど君たちから学んだことか。計り知れません。多謝。

もうすぐ、新しい生徒さんたちに出会います。皆さんと学ぶ中で得たものを活かし、また一つ一つ、彼らと積み上げていきたいと決意を新たにしています。精一杯、頑張ります。皆さんも、関高校での日々に全力で取り組んでください。陰ながら応援しております。それでは、また会う日まで。



📖 R3 年度春、演劇部のみなさんと。